

釜ヶ崎「こどもの里」(無認可児童館)の「子ども夜まわり」の実践

八重樫 牧子⁽¹⁾

The practice of the children's night watch activity of Kodomonosato in Kamagasaki

YAEGASHI Makiko⁽¹⁾

There are three purposes of this study; 1) to focus on the Children's Night Watch Activity, it has designed to raise children's self-esteem by their leaning experiences, which has been looked for a clue to develop a support program of children's hall, 2) to clarify the actual condition of the child support which has been done by the group of KODOMONOSATO, 3) to examine the meaning to significance. As a result of our research, following facts are clarified; 1) Children's Night Watch Activity is a hands on learning which gives children an opportunity to understand the condition of homeless people with deep empathy and facilitates children's growth by themselves, 2) The meeting for "Children's Nigh Watch Activity" and "Sharing Each other", where a place to express their opinion as their rights, provides recovering children's confidence and self-esteem. This research evidence demonstrates the empowered interrelationship between children, who has participated the Night Watch Activity, and homeless people through the lively meeting and events.

Keywords : children's night watch activity
empowerment, homeless people,
children's hall
poverty of children

1. はじめに

児童館は児童福祉法成立以来、地域社会において「子どもの居場所」としてすべての子どもの育ちを保障し、子育て家庭を支援してきた。今後も児童館は地域社会の子育ち・子育て支援の拠点の一つとして重要な役割が期待されている。しかし、2003年に「地方自治法の一部を改正する法律」が施行され、児童館にも指定管理者制度が導入され、2012年度より民間の児童館の運営費についても一般財源化され、児童館施策は市町村裁量となった。今後とも児童館を継続的に運営し、子

育ち・子育て支援を行っていくためには、これからの児童館の実践のあり方が問われている¹⁾。

そこで、筆者は無認可児童館ではあるが、大阪市西成区の釜ヶ崎において先駆的な実践を行っている「こどもの里」の歴史を振り返り、その理念を検討した²⁾。その結果、次の5つの特徴が明らかになった。第1には実践を通して支援者自分の価値観や生き方が変えられたこと、第2には子どもの自尊感情を育むために体験的な学習活動を重視してきたこと、第3には子どものたちの「生活の場」を提供していること、第4には

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

地域社会に子育て・子育てネットワークを創り、連携し、協働して問題の解決を図っていること、第5には公的な事業を活用しつつ、独自の事業を創設し、展開できる民間の特徴を生かした実践を行っていることであった。

本研究の目的は、特に第2の特徴である「子どもの自尊感情を育むための体験的な学習活動」である「子ども夜まわり」の実践を取り上げ、「こどもの里」の子育て支援の実態を明らかにし、その意義について考察を行い、児童館等の「子どもの居場所」における子育て支援プログラムの開発の手がかりを得ることである。

「こどもの里」の実践を取り上げることにした理由は、この施設の実践がすぐれているということだけではなく、今日、子どもの貧困が児童家庭福祉の分野においても重要な課題となってきたからである。2013年6月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立し、2014年1月に施行された。子どもの相対的貧困率は1990年代半ば頃からおおむね上昇傾向にあり、2009（平成）年には15.7%となっている。子どもがいる現役世帯の相対的貧困率は14.6%であり、そのうち、大人が1人の世帯の相対的貧困率が50.8%と、大人が2人以上いる世帯に比べて非常に高い水準となっている³⁾。2012年5月末に、ユニセフが発表した日本の子どもの相対的貧困率は14.9%であった⁴⁾。日本の子どもの約6人に1人が貧困状態にあると推定される。子どもの貧困はどの地域でも珍しいことではなくなっており、いろいろな困難を抱える子どもたちを受け止める居場所を創る必要性が高まってきている。「こどもの里」は貧困など多様な家庭事情を背景にもつ子どもたちが利用しており⁵⁾、これまで子どもの貧困に向かい合ってきた「こどもの里」の実践から学ぶことは多いと思われる。

2. 研究方法

研究方法は、「子ども夜まわり」に関する文献研究と、フィールドワークである。2013年度の「子ども夜まわり」の参与観察や参加者へのインタビュー結果を中心に分析を行う。

なお、フィールドワークの内容は以下の通りである。

2013年冬第6回・釜ヶ崎ワークキャンプ（2013年12月26日～29日：3泊4日）に参加した。2013年度の「子

ども夜まわり」は2014年1月～3月の土曜日（1月11日、1月18日、1月25日、2月1日、2月15日、2月11日、3月1日、3月8日）に実施されたが、全8回中1月18日を除いた7回の学習会と「子ども夜まわり」に参加した。同年3月16日に「2013年度協友会越冬報告集会」が開催されたが、「こどもの里」の子どもたちも報告を行ったので、これにも参加した。また、同年5月5日に「こどもの里」34周年パーティーが開催されたので、その準備・片づけも含め行事に参加し、翌日の5月6日に「こどもの里」館長のヒヤリング調査を行った。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については、福山市立大学研究倫理規定（福山市立大学規定第74号）に従った。文献等の扱いについてはプライバシーと人権の点から倫理的配慮を行った。本研究を執筆することについては「こどもの里」の荘保共子館長の了解を得ている。

4. 研究結果

4-1 こどもの里の理念

「こどもの里」は次の5つのことを理念として掲げ、大切にしている⁶⁾。①必要とする人は誰でも利用できる場であること：〈安心の場〉、②遊びの場、休息の場であること：〈愛されているという実感があり、失敗しても大丈夫な自由な場〉、③学習の場であること：〈生きているだけですばらしい、自信と自己尊重な場〉、④利用する子どもたちや保護者の抱える様々な問題を受け入れられる場であること：〈聴いて、受け止めてくれる人がいる場〉、⑤より弱い立場の友達と社会の谷間におかれている友達と共に助け合って生きていける場であること：〈必要な生活の場、仕事の場等、新しい福祉地域文化を創造する場〉である。この理念は、「こどもの里」の実践から生まれてきたものである。

「③学習の場」では、様々な家庭環境で重荷を負っている子どもたちが、釜ヶ崎という地域を知り、そこに向けられている差別や偏見などの問題と戦い、それにうち勝てる人間になれるように助けること、また同じように抑圧された人たちにも心をはせることができる人になることを大切にしている。そのために「学習会」や「子ども夜まわり」が実施されている。

4-2 子ども夜まわり

「子ども夜まわり」と「学習会」は、1983年に横浜・山下公園で野宿者が少年らに襲撃され死亡した事件をきっかけに始まった。また、1986年には大阪の四天王寺境内で野宿していた労働者5人を中高生3人組がエアガンで襲撃するという事件がおきた。事件に衝撃を受けた館長は、釜ヶ崎の子どもたちにアンケート調査を実施し、釜ヶ崎の野宿者についての意識を調べた。その結果、半数近くが「汚い」「じゃまだ」「他に行ってほしい」と嫌悪感を抱き、さらにその内の半数近くが「野宿者をからかったり暴行したことがある」と答えており、野宿者に対する差別や偏見は釜ヶ崎の子どもたちも同じであることが分かった⁷⁾。

そこでこの差別や偏見をなくすために、1986年から

「人を人として」をテーマとする釜ヶ崎キリスト教協友会の越冬夜まわり⁸⁾に参加し、実際に野宿者と話をし、「子ども夜まわり」と学習会を始め、今日まで続けている。2013年度「子ども夜まわり」は第28回目となった。「こどもの里」の子どもたち、保護者、スタッフそして外部参加団体（小・中学校、カトリック教会など）の参加者など、合計で約60人が厳冬期の1月から3月の毎週土曜日に夜まわりを行っている。

夜まわりの意味を子どもの立場で考えるために、毎年テーマを決め学習会が開かれるが、表1に示すように第1回目のテーマは「釜ヶ崎の労働者と私たちの関係」であり、今年度（2013年度）のテーマは「釜ヶ崎とフクシマをつなぐもの」であった。講師は、「大阪市立あいりん小中学校」の元ケースワーカーである小

表1 こどもの里—子どもの夜まわり学習会小史

回数	年	学 習 テ ー マ
第1回	1986年	「釜ヶ崎の労働者と私たちの関係」
第2回	1987年	「おっちゃんごくろうさん～学校でおしえてくれない日本・釜ヶ崎の歴史」
第3回	1988年	「アジアの子どもたちと釜ヶ崎—戦争と開発と子どもの生命」
第4回	1989年	「釜ヶ崎と子どもたち—子どもの権利条約」
第5回	1990年	「アイヌ民族と釜ヶ崎（寄せ場）—真実の出会いを求めて」
第6回	1991年	「日雇い労働者と野宿労働者と行路死」
第7回	1992年	「世界の先住民」
第8回	1993年	「寄せ場から生命を考える—アイヌ民族の生き方に学ぶ」
第9回	1994年	「子どもの権利条約」
第10回	1995年	「寄せ場から生命を考える沖縄—ヌチドウタカラ」
第11回	1996年	「野宿するおじさんたち」
第12回	1997年	「おじさんの個人史を通じて」
第13回	1998年	「日雇いの仕事と野宿と行路死」
第14回	1999年	「野宿するおじさんたちの生活」
第15回	2000年	「釜ヶ崎の労働者と私たちの関係」
第16回	2001年	「日雇労働者と野宿と行路死」
第17回	2002年	「ジェンダーから見る釜ヶ崎（なんで釜ヶ崎にはおじさんが多いの？）
第18回	2003年	「釜ヶ崎の労働者と私たちの関係」
第19回	2004年	「憲法第9条とわたしたち」
第20回	2005年	「戦争と子どもたちの生命」
第21回	2006年	「排除と戦争」
第22回	2007年	「おっちゃんたちのいのち」—1983年2月6日におきたこと
第23回	2008年	「おっちゃんの人生を聴く—川口猛さん（67歳）」
第24回	2009年	「いまの釜ヶ崎を知ろう—野宿者と私たちの自尊感情」
第25回	2010年	「釜ヶ崎のこれまでの歩み—子どもの目から—その1”釜ヶ崎の誕生から戦前”」
第26回	2011年	「釜ヶ崎のこれまでの歩み—子どもの目から—その2”戦後とあいりん中学校”」
第27回	2012年	「釜ヶ崎のこれまでの歩み—子どもの目から—その3”釜ヶ崎と筑豊（炭鉱）”」
第28回	2013年	「釜ヶ崎のこれまでの歩み—子どもの目から—その4”釜ヶ崎とフクシマをつなぐもの”」

注) 講師は「大阪市立あいりん小中学校」の元ケースワーカーである小柳伸顕牧師

出典：釜ヶ崎キリスト教協友会（2014）「よまわり 2014年1月～3月ガイドブック」

柳伸顕牧師である。

この学習会から表2のような創造的な表現活動が生まれ、海外での学習に発展している。2012年夏からは、戦争を子どもたちの人権から見直すためにコルチャック先生を中心にした学習をはじめ、2013年の夏には、ドイツ・ポーランドスタディーツアーが行われた。その成果は「命～子どもたちと戦争」の劇として、2014年5月5日「こどもの里」34周年パーティーにおいて

実演された。

学習会の後、釜ヶ崎を中心にいくつかのコースに分かれて、野宿者の所に行き、野宿者に声をかけ、体調や色々な話を聞き、おにぎりや温かい味噌汁そして毛布やカイロなどを配っていく。午後10時から12時の2時間くらい夜まわりをした後に「こどもの里」に再び集合し、参加者が感じたこと、気づいたこと意見などを書き、参加者全員が発表し、分かち合うことによ

表2 学習会の成果

1	「バナナと釜ヶ崎と私たち」という劇ができたこと（外国人労働者がテーマ）
2	フィリピンやタイの子どもたちとの出会いを求めて外国にでかけたこと（90, 93, 95, 97, 00年に訪問）
3	アイヌ民族の子どもたちと北海道で交流することができたこと
4	1年を通じた沖縄勉強会で創作実話劇「チビリガマの集団自決」に取り組んだこと
5	「命（ヌチ）ドゥ宝」の旅、沖縄スタディーツアーに出かけたこと
6	2012年～2013年の1年間、戦争を子どもの人権から見つめ直そうと、コルチャック先生と画家ケーテ・コルヴィッツを中心に勉強し、2013年に13日間のドイツ・ポーランドへのスタディーツアーに出かけた
7	「命～子どもたちと戦争」の劇（2014年5月5日「こどもの里」34周年パーティーに実演）

注) こどもの里（2014）「子ども夜まわり学習会小史」『2012年度こどもの事業報告』の内容を表にし、一部追加した。

表3 2013年度 子ども夜まわり参加者数

回数	月 日	子 ども				大人	合計	主な外部参加団体（個人を含む）
		幼児	小学生	中学生	高校生			
1	1月11日	1人	14人	11人	3人	37人	66人	5（児童養護施設、地域包括支援センター、病院等）
		29人						
2	1月18日	0人	6人	4人	4人	24人	38人	5（保護者会、大学、小学校、中学校、病院等）
		14人						
3	1月25日	0人	8人	8人	8人	23人	47人	4（中・高等学校、大学、病院等）
		24人						
4	2月1日	0人	6人	18人	2人	50人	76人	6（大学、小学校、中学校、病院等）
		26人						
5	2月15日	0人	7人	12人	9人	31人	59人	8（中学校、高等学校、大学、大学院、カトリック教会、保護者会、病院等）
		28人						
6	2月22日	0人	9人	13人	5人	44人	71人	4（カトリック教会、大学、高等学校、病院等）
		27人						
7	3月1日	0人	9人	8人	2人	36人	55人	5（カトリック教会、大学、保護者会、小学校等）
		19人						
8	3月8日	0人	11人	15人	2人	33人	61人	4（中学校、大学、病院等）
		28人						
合計人数		1人	70人	89人	35人	278人	473人	
平均人数		0.1人	8.8人	11.1	4.4人	34.8人	59.1人	
		24.4人						

出典：「こどもの里」の記録より

表4 2013年度 野宿者数(子ども夜まわりで出会った人たち)

コース	釜ヶ崎 A		釜ヶ崎 B		日本橋			天王寺	なんば				合計
	シェルター	釜ヶ崎内と周辺	釜ヶ崎内と周辺	山王	日本橋	新世界	えびす町駅	天王寺	難波駅周辺	なんばハッチ	天王寺	淀屋橋	
1月1日	309	59	34	17	10		20	16	1	7	24	3	500
1月18日	302	77	18	14	14		18	19	5	7	22	2	498
1月25日	295	80	19	18	22		22	17	6	6	20		505
2月1日	285	73	23	17	11	2	22	19	10	7	21		490
2月15日	294	74	21	16	10	5	17	16	11	5	16		485
2月22日	303	65	23	14	11	4	15	18	7	6	23		489
3月1日	293	64	20	15	10	7	7	11	5	7	22		461
3月8日	297	71	18	16	11	5	18	16	9	6	26		493
合計人数	2378	563	176	127	99	23	139	132	54	51	174	5	3921
平均人数	297.3	70.4	22.0	15.9	12.4	4.6	17.4	16.5	6.8	6.4	21.8	2.5	490.1

出典：「こどもの里」の記録より

てより学びを深めている。

2013年度の「子ども夜まわり」の参加者は表3に示す通りである。子どもの参加は延人数195人で、中学生が89人と最も多く、次に小学生70人と続き、高校生は35人であった。幼児も1人保護者と一緒に参加していた。大人の参加者も多く、278人が「子ども夜まわり」に参加した。「子ども夜まわり」で出会った野宿者数は表4のとおりである。シェルターの野宿者には声をかけることはないの、この人数を除くと、「子ども夜まわり」で出会った野宿者の延人数は1543人であり、平均人数は約193人であった。

5. 考察

5-1 体験学習としての「子ども夜まわり」

「子ども夜まわり」では、子どもたちがなぜ野宿者を嫌悪したり、排除したり、差別したりするのかということを知識だけではなく体験をとおして理解し、実感とともに学んでいくことが大事にされている。「子どもの夜まわり」は、「体験」「学習」「解放」(解決)の三つの段階を繰り返し行う「体験学習サイクル」を基本に続けられている。この学習方法は、第1回目の「子ども夜まわり」から取り入れられている⁷⁾。

第1段階の体験「いっぱい、ねてはるわ」では、日雇労働者の現実、生活状況等を寒い中、夜野宿せざるを得ないおじさんたちとの「出会い」を通して膚で感

じる。第2段階の学習「なんで、ねてんの？」では、野宿を余儀なくされる環境が「なぜ」生まれるのか、知り、理解する。そして、第3段階の解放「どないしたら ええねん」では、体験と学習を通して、偏見や差別を知り、気付き、それから解き放される。そして、一人の人間の生命の尊さを知り、差別を見抜く力を養い、差別と闘って生きていくことを学ぶ。最初は同情や「よいことをしたい・してあげたい」という段階からスタートしても、繰り返し、繰り返し体験を通し学習することによって、次のようなことを目指すようになる。「ぼくらが夜まわりをするのはよいことをしてんのとちがう。人として当たりまえのことをやっただけや。だいたい、夜まわりをせなあかんこと自体がおかしいんや。外でねなあかん人がなくなるよう、ぼくらががんばらあかん⁷⁾」と言えるようになることである。

このような体験学習を通して、子どもたちは野宿者たちを単に“かわいそう”とみる同情や憐みの意識ではなく、まるで我がことのように胸がしめつけられ心が痛む気持ち「肝苦さ(ちむぐるさ)」（沖縄の言葉）という深い共感の中で野宿者を理解し、子ども自身が変わり成長しているのである⁹⁾。

5-2 意見表明権の行使としての「分ち合い」

学習会や「子ども夜まわり」の後、参加者が感想を

分ち合うことは、自らの意見表明権を行使する機会として重要な意味をもっている。また、自分の体験を言語化し、発表することによって地域の関わりのある人々から承認される。例えば、「子ども夜まわり」には、「こどもの里」の子どもたちが通う学校の先生も参加することがある。学校でなかなか先生と関わりが持てない子どもも、先生と一緒に「子ども夜まわり」を行い、「分かち合い」の時に学校の先生からほめられ、認められるという体験をする。このような体験は、ともすれば自尊感情の低い子どもたちが自信を回復し、自尊感情を育むことになる。

6. おわりに

「こどもの里」の館長荘保共子は「子ども夜まわり」について、次のように語っている¹⁰⁾。

「・・・野宿者に対する偏見と差別に子どもらの力で抗する。夜まわりなんかしなくてもいい社会にしたいと、毛布・おにぎり・ポットの準備から学習会、夜まわりと、毎回8時間を超す活動をやってこなす。その力たるや『凄い!』の一言だ。子どもの権利の一つ『集会する権利』を行使している。この夜まわり活動で、私たち大人が想像もしなかった『子どもの力』に出会った。・・・子どもたちのこの自然な無垢な『人と繋がろうとする力』は、野宿者から最高の褒め言葉『ありがとう』をいっぱい浴びて、傷ついた子どもの心にふつふつと他者へのいたわり・心配の心が息吹き、それが自分自身への愛しさと自信を息吹かせる。一方野宿者と言えば、寂しくおびえながらいる寝床に子どもらの訪問を受け、『これで明日も頑張れるわ』と生きる気力を取り戻す。・・・夜まわりでの子どもと野宿者との出会いは、お互いがエンパワメントされあう関係を生み出した。(アンダーライン筆者による)」

森田ゆり¹¹⁾は、エンパワメントとは「力をつけること」ではなく、人と人の関係のあり方であり、人と人との生き生きとした出会いの持ち方であり、お互いがそれぞれの内に持つ力をいかに発揮し得るかという関係性であると述べている。「子ども夜まわり」を通して、子どもたちは、子ども同士、支援する大人そして野宿者との生き生きとした出会いを通し、エンパワメントされあう関係性を生み出している。

筆者は、子育て支援とは「子どもの主体性とニーズ

を尊重しつつ、子どもの個性化と社会化を促し、子どものウェルビーイングを保障し、エンパワメントを図るような社会的支援の総称」であり、子育て支援を実践するためにはエコロジカルな視点が必要であると述べた¹⁾。

「子ども夜まわり」という「こどもの里」(無認可児童館)の子育て支援は、釜ヶ崎というエコロジカルな環境において、実際に野宿者や支援者や子どもたちとの直接的な対話による深い共感を通して、子どもたちが自身が自尊感情を回復するエンパワメントの実践であるといえる。

今後、児童館などのような「子どもの居場所」にこのような体験学習を取り入れ、子どもたちのエンパワメントを図っていくことが課題となる。子どもたちが体験学習を通して、どのようにエンパワメントされるのかそのプロセスを理解するために、「子ども夜まわり」に参加した子どもたちの感想文や、子どもの時「こどもの里」で「子ども夜まわり」を体験した成人にインタビュー調査も行い、より掘り下げた分析・考察をしていきたいと考えている。

付記 本研究は、平成25～27年度科学研究費助成事業(基盤C) 課題番号 25380755 研究代表者: 八重樫牧子「児童館の実践モデル開発にむけた釜ヶ崎『こどもの里』の実践に関する質的調査研究」の研究成果の一部である。

また、本研究の内容については、2014年度第15回日本子ども家庭福祉学会全国大会(2014年6月8日、新潟県立大学、新潟)において、「釜ヶ崎『こどもの里』(無認可児童館)の『子ども夜まわり』の実践」(発表者: 八重樫牧子)というテーマで口頭発表を行った。

謝辞 最後に本研究をまとめるにあたってご協力をいただきました「こどもの里」の館長荘保共子様、スタッフの皆様、子どもたちそして「子どもの夜まわり」で出会った参加者や野宿者の方に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 八重樫牧子(2012)『児童館の子育て・子育て支援—児童館施策の動向と実践評価—』相川書房。
- 2) 八重樫牧子(2014)「子どもの貧困と『子育て』支援—釜ヶ崎の「こどもの里」(無認可児童館)の歴史と実践を支える理念」安川悦子・高月教恵『子どもの養育の社会化』御茶

の水書房.

- 3) 内閣府(2014)「子どもの貧困」『平成平成 25 年版 子ども・若者白書』http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/b1_03_03.html.
- 4) UNISEF Innocenti Research Centre (2012) 『Report Card 10』 United Nations Children’s Fund (UNICEF).
- 5) 「こどもの里」に登録している子どもは以下の表の通りである。ひとり親家庭や生活保護家庭の子どもが多いのがわかる。

表5 2011年度 こどもの里の登録者数

	登録者数(人)	内留守 家庭数	生活保 護世帯	ひとり 親家庭	障がい 児・者	外国籍	
0歳-3歳	16	32	11	1	1	0	4
4歳-6歳	16		7	6	7	1	2
小1-小3	19	34	6	7	8	3	0
小4-小6	15		7	4	11	1	3
中学生	14	34	7	5	11	4	2
高校生	12		6	5	11	4	1
18歳	6		4	1	2(自活) 2	2	0
大人	2		0	0	0	2	0
合計	100		48	29	51+2	17	12

出典：こどもの里 (2012) 「2011年度こどもの里事業報告書」

- 6) こどもの里 (2013) 『2012年度子どもの里事業報告書』
- 7) 協友会・こどもの里 (1987) 「子どもたちによる “越冬夜まわり” の主旨とおさそい」『里夜まわりだより No 1』.
- 8) 釜ヶ崎キリスト教協友会夜まわりは下記のような実施されている。「こどもの里」は毎週土曜日に夜まわりを行っている。

表6 釜ヶ崎キリスト教協友会夜まわり予定表
2014年1月～3月上旬

曜日	団体名	集合時間	備考
月	ふるさとの家	午後8時	聖フランシスコ会
火	暁光会	午後8時半	社会福祉法暁光会大阪支部
木	木曜日夜まわりの会	午後10時半	イエズス会社会司牧センター旅路の里
金	喜望の家	午後9時	日本福音ルーテル教会
土	こどもの里	午後8時	宗教法人カトリック大阪大司教区

注 (1) 山王子どもセンターは不定期で月1回

- (2) 愛徳姉妹会は昼まわりを実施
- (3) 釜ヶ崎キリスト教協友会は1970年にキリスト教のカトリック・プロテスタントの教会や修道会など5団体で結成された。目的は「布教」ではなく日雇労働者の街で必要とされ、何が出来るか、キリスト者としてどう関わっていくのかを自ら問いながら、必要な活動を共同で取り組んでいる。現在11団体。

- 出典：釜ヶ崎キリスト教協友会 (2014) 「よまわり 2014年1月～3月ガイドブック」, 釜ヶ崎キリスト教協友会 (2009) 「人を人として 活動パンフレット」
- 9) 北村年子 (2009) 『ホームレス襲撃事件とこどもたち』 太郎次郎社エディタス.
- 10) 荘保共子 (2011) 「この子どもたちがいるから日本は大丈夫」 畑口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編著『釜ヶ崎のススメ』 洛北出版 .p.76.
- 11) 森田ゆり (1998) 『エンパワメントと人権』 解放出版社, p.14.

(2014年10月31日受稿, 2014年12月10日受理)